

風上げ、カルタ、羽根つき等々、かつての正月の行事がほとんど失せてしまった今日、いよいよ正月気分は社会から失せてしまったのだろう。

正月と言えばこんなことを思い出す。私が短歌新聞社に入って間もない頃だったか、藤川という青年が社を訪れた。誰かがここで仕事を始めたのを教えたのだろう。

社のドアを開けるや否やこう言うのである。「及川さん、中井英夫さんがこう言っていますよ。佐佐木幸綱は齋藤茂吉で、福島泰樹は塚本邦雄、及川さんは折口信夫だ……」

何のことかとよく分からなかったが、新宿三光町のバー薔薇^{ばらばら}士で中井さんが我々と会った時の印象をその青年に述べたらしい。

幸綱が茂吉というのは解るにしろ、私が逍空だなんて正に月とスッポンである。余りに格差があるので、このエピソードを記すのは初めてである。

藤川という青年、今はどうしているだろう。三一書店が『現代短歌大系』を企画した時の次席に選ばれた方で、入賞は今も活躍している石井辰彦であった。

入選作品には柏木茂も入っていた。後に

雁書館から『功子』を刊行して期待されたが、その後、行方が全くわからなくなってしまった。藤川という青年、新聞社の作品依頼で来社したのである。

さて、薔薇士へ行ったのは何の会の二次会であつたらうか。富士田元彦さんの誘いで、幸綱さんと福島泰樹、小紋潤と私の四人が共にしたことを覚えているが、当時は手帖を持たなかつた年もあり、明確な記憶が無い。富士田さんも小紋君も他界。幸綱さんは覚えていられるかも知れない。

さて、中井さんとはその後、とうとう会う機会は持てなかつた。『虚無への供物』や『黒衣の短歌史』を読み、優れた幻想小説家であり、かつ塚本邦雄、中城ふみ子、寺山修司を世に送り出した名編集者であることは異論無からう。

しかし、友人の持田綱一郎さんが、かつて小生と呑みながらこう語つたことがある。「編集者は中井さんのような一本釣りの方法で才人だけを拾い上げるのはどうか？塚本や寺山のような天才や才人だけ世に送り出すので無く、潜在能力を備えた地味な作家や歌人を取り上げるのもエディターの大事な仕事だろう」と。「天才や才

人だけ舞台上で踊らせるなかれ」との直言である。

ちよつと意外な発言だと思つたものの、私も長く歌人の分野の編集にかかわり、また、他の分野でもいろいろ仕事にかかわつてきたひとりとして、正論だと確信したのである。

筑摩書房で長く編集者として活躍され、歌集も数冊刊行され、近年は『良寛』（作品社）を上梓し、翻訳者としても活躍されている持田さんである。大いに耳を傾けるべき指摘であろう。

もちろん、有能な作家や歌人は当人の能力によつて世に出るとも限るまい。潜在能力を見出すエディターや目利きがいて活躍される方も多いにちがいない。

そんなエピソードもあつて、「心の花」を去つたとはいえ、今も持田さんには「短歌往来」にて長きにわたる連載「浪々残夢録」を記してもらつている。

それにしても歳月は人を待たずか。中井さん、富士田さん、小紋君も世を去り、行方知れずの柏木君もどうしているか。